



能古博物館だより

能古古窯跡から自然生態林をぬって本館へつく

写真・杉山 謙 (日大写真学科)

能古島古窯をめぐる問題 (続)

丸山 雍成

三 能古焼と有田焼との関係

このように高取焼の名家では、能古島にまで原料石を求めて技術の刷新に努めてきたが、大した成果を挙げることができなかった。これに対し、その頃、能古島古窯でも旧来の陶法に対する反省の上にたち、肥前有田磁器の技術を導入して新展開を期する機運が醸成されていたようである。前号の地誌(C)『筑前国統風土記拾遺』・D)『筑前町村書上帳』が能古島において天明初年頃に「陶器」を製したとする記事に関して、筆者は、焼成「製品の質的变化」を想定したのであったが、これは実は「陶器」の製産から「磁器」のそれへの移行を意味するといっている。

先にふれた高取純方の「秘伝書」は、能古島の原料石を取りよせて高取焼の製作に使用してみたとする記事につき、「天草石 地土又薬にも相用申事も其頃少し前の事也」とし、さらに「天草石は黒葉・道外には宜敷も弱し」と述べている。これ

は高取焼の名家も一時、天草石を陶器製産のための原料土や釉薬などに使用しようとしたこと、それが磁器でなく陶器用途のため失敗に帰したこと、を物語るものである。これに対し、能古焼における天草石の用途が明らかに肥前有田焼の技術導入による磁器製産のためだったことは、『皿山代官日記覚書』天明七年七月の次の記事によって推察される。

一筆致啓達候、筑前鋸嶋・須恵両山へ有田筋を佐十郎と申者、焼物細工ニ罷越居候段相聞候ニ付、為捕方下目明共被差越候処、只今ニ而ハ右場所不能在段、委細別紙之通申達候、佐十郎儀、有田中樽新九郎・良之進・為次郎とも様々致名替候間、其心得を以、弥中樽山之者ニ而他領罷越居申儀ニ候哉、手筋を以密々御聞合、早々可被仰越候、此段可申遣旨ニ付、如此御座候、恐惶謹言、

未七月廿二日 受役所

これは佐賀藩の請役所が有田皿山代官所に宛てた、逃亡焼物師の探索

依頼書である。これによれば、有田筋の佐十郎なる者が筑前能古島・須恵の両山（両登り窯）に焼物細工に來ているとの噂があったので、佐賀藩ではこの逮捕のため下目明しを派遣したことがわかる。もっとも、この記事だけでは、実際に佐十郎が能古島古窯に來て有田磁器の技法を駆使して製品を焼成したとする確証にはならぬが、しかし同古窯址から磁器の製品およびその破片が出土しているのも、その可能性を低くみることはできないだろう。

さて、右の探索依頼書は、佐十郎が中樽山の者で種々改名したことなども記しているが、さらに詳細な「別紙」を付している。これによると、佐十郎は賃銭五、六百文ずつで雇傭され、生活状態もよく、普段は絹布などを着て、博多の遊所へも出かけ、毎度過分の博奕はくまをしていると取沙汰されている。そこで実際に同人が有田の者かどうか、下目明しに調べさせたところ、有田中樽山の新九郎・良之進なる者がここ二、三年ほど見えぬが、一年のうち一兩度は宿元に姿をみせ、当年の二、三月頃ちょっと來たことがあるという。同人は良之進とも為次郎とも名替えしているが、取沙汰された人相などは

佐十郎に違いないとのことで、その旨報告してきた。

このため早速、捕方を命じ、下目付ら二人と良之進をよく知る長崎路境原宿の者二人を能古島・須恵まで派遣したが、小倉アカ山へ場所替えしたとのこと。そこへ直行し、飯塚宿の目明しら二人に依頼して調べる、清水山で二十日間ほど細工に従事しているというので、右の登り窯を實現したところ、佐十郎はその三日前に鳥目十貫文を借りて立ち去ったという。上方筋へ登ったか、どこに一先ず忍んでいるのか、とにかく下関まで渡ったことは紛れないとの由なので、やむなく皆帰った、と目明しが報告してきた。最前是有田筋から数人が筑前へ罷り越したという噂があり、それが佐十郎以外に何某というか明らかではない。他領の者は数人が來ているとの由で、この中に佐賀領内の者も紛れていて、清水山の彼に内通したのではないか。捕方の者は極密にしてきたので、いずれ筑前須恵から連絡したのに違いなると、小倉では目明しらが噂し、ほかに洩れる筈はない、とも報告している……。

探索方依頼書の「別紙」は、こう説明しているが、有田皿山より佐十

郎ら数人が筑前能古島などへ移ったことは噂ながら根拠のあるところと思われる。この請役所からの問い合わせに対して、有田皿山代官所は佐十郎に関する内密の調査結果を、次のように伝えた。

絵書の佐十郎（もとの名を良之進・為次郎という）は、肥前武雄の筒江山の者であり、その祖父は武雄の牢人で皿山に居住していたが約二十年前に帰參、また父新九は皿山生れで絵書を習得、筒江山にいながら上幸山・中樽山辺にある懇意な者の居宅や当分の借宅などで職稼ぎをしていたという。為次郎自身は、親の見舞いに逗留したこともあるといい、この者ではないのか。他に中樽山から他領などへ罷り出た者もみえない。もっとも、仰せ聞えでは「細工人」とあるが、当人は「絵書」である。なお内密に調べて申すべきだが、名元の儀は同人が該当するので、まずは申し達する。

この有田皿山代官所の調査報告書においては、筑前能古島か須恵の両山への逃亡焼物師は、中樽山などの父新七を見舞ったりしていた筒江山の絵書、佐十郎（為次郎）と指定されている。これは、能古島古窯より出土した焼成器が筒江窯系統のもの

と鑑定されていることと符合し、概ね妥当な判断といえるだろう。換言すれば、能古焼古窯は有田筒江山の絵書佐十郎らの技術移植によって、天草石を使用しながら有田磁器の製産が推進されはじめていたこと、それが佐賀藩の探索により僅か五ヶ年で中断せざるをえなかったこと、が推察されるのである。

その間、能古島古窯では、有田筒江窯系の染付を中心とする陶磁器が製産されたが、残存遺物中には白磁・青磁・陶器を一、二割ふくみ、主に碗・皿・中皿・小皿・蓋・湯呑碗・猪口・紅皿などが多く、基本的には日常雑器が焼成されたことが知られる⁴⁾。

作十郎の退去後、同古窯において、有田焼（磁器）から高取焼（陶器）への回帰による再生・持続がみられたか、あるいは直ちに廃絶したかについては、適確な判断の材料に乏しいが、『筑前国統風土記拾遺』などの記事から推して、おそらく陶、磁器とも製作はされなかったものとみられる。それはまた、能古島の神宮寺上の拝領山にある石が、高取焼にとつて部分的ながら「余り宜無之候ニ付、相止め、また天草石も高取焼など陶器製産に適当な品質でなかつ



満州義軍に於て銃創により大連野戦病院に入る (明治38年3月)

世界的長距離で知られるロシアのシベリア鉄道は単線で、これを補なう

折った。日にはロシア受諾が伝えられていたが露軍には日々後統部隊の増強と物資の補給が見られ、現地における我が方は実に一喜一憂しながら講和の成立を祈った。

早や北支の山嶺は白く一天澄み渡った朝であった。

十月二十七日、通化に於て満州義軍解散式を挙行。

（いまの正興電機製作所創立者）が脚元になった祝賀会が連日つづいた。玄洋社進藤喜平太社長に挨拶し、

親せきみんなが集まって祝い膳についたり、町内の人、その他見知らぬ人までが、日々凱旋祝いに来てくれ、父母はじめ家族みんなが、初めのことながら笑顔で応対し、祝い酒をふるまっていた。

わが統率の半小隊と露軍騎兵との交戦は、敵に執拗な攻撃がなく、戦闘短時間で隊員に死傷がなかったのが最善であった。多くの左脛骨貫通銃創も幸いに脛骨を外れており、大連野戦病院での治療は二週間の安静

で歩行できるまでに回復、七月十三日に帰隊した。二十日間、初めて義軍を留守にしたのである。すでに六月に入って、米国ルーズベルト大統領による日露両国に講和勧告があり、同月十日に日本、十二

果は実に計り知れないものがあり、現地における義軍幹部には深い感慨をもたらしした。

家が、留守中に父の仕事も忙しくなり、母、姉弟みな健康で表情も明るかった。ぼくの留守宅渡し給与が八百円余に、これからなお六百円ほどが貯金で残っていると母が話してくれた。

原題「真翁聞きがき」 真翁銅像ものがたり (四)

- ・義軍解散と帰省
- ・再びウラジオに
- ・北洋漁業ひとすじ

たことも無関係ではなからう。⁵⁾
この能古焼の製品は、能古島内外の一般庶民の生活必需品となったのみならず、一時的ながら廻船に積載されて、遠く大坂市場で販売、富裕の人びとに愛用されたともいわれている。その詳細については今後の究

明にまたねばならぬが、能古島古窯址は、こうした歴史のロマンを秘めながら、いま静寂の中に永遠の眠りをつづけているのである。

待避用の複、支線は少なかつた。これに機関車の不足もあって、開戦後は列車連結を長くしたため単線運行が益々悪化、短い待避線は長い連結車には役立たずであった。これが露軍の戦力増強を欠き、敗戦の一因にされた。一時は列車を終着駅で使い捨てにしたほどであるが、こうした鉄道不整備も開戦後から改良に努め、ようやく終戦後に運行能力の向上が見え始めた。日露戦を短期終結に所得た政府の決断と外交の効

徹的である。この手法は有田焼の主流ではなく、有田焼系とされる有田周辺の筒井窯の手法で「ある」としている。
（4）庄野寿人・田崎博之「能古島古窯跡発掘調査概要」（昭和六十年）。

【註】
（1）（5）高取静山編「高取家文書」（昭和五十四年）三八一〜三八二頁。（高取

焼「薬調合変化の記録」。
（2）池田史郎編「皿山代官旧記書書」（昭和四十一年）四九八〜四九九頁。
（3）福岡市教育委員会文化課「能古焼古窯跡」の史跡指定文案においては、「特に皿類は、見込に昆虫紋様を手描きし、蛇の目高台に一重もしくは二重の方形枠内に『漏福』を記するのが特

前号の分（一、二項）の【註】記載を省略したことを、お詫びします。

能古博物館だより

多くの体験を報告したことはいうまでもない。

ただ、玄洋社に風情をつくっていただいた川越末亡人が直方の小学校教師になられ、お姿が見られなくなっていたのは、いささか残念であった。

帰郷三週間ほどで、今後のことを決めるため再上京することにした。

出発前、母が家を買えと勧める人があると、相談してくれた。この時初めて家一軒(土地付)の相場がわかり、母が持っている多くの貯金程度でラクに買えることを知った。しかし、ぼくは自分の将来が未定でもあるので、いま家を買うのは見合わせて、なお今後の家計不足に備えてほしいと話した。なお、近く陸軍省から一時給与金が百二十円ほど送金されるが、これも合わせて家計に加えるようにした。

上京、郷党大先輩である外務省総務局長の山座円次郎氏を訪ねた。これは帰国後すぐに訪問した杉山茂丸さんから海外に出る気があるなら山座君に話しておく、とされていたことによる。

早速、「ウラジオストックに総領事館設置が決まっているが、どうか」と言われ、願ってもないことであり、しかもその初代総領事は川上俊彦氏

ということである。

すぐ、川上総領事に会ってみると、大いに喜んで貰い、実は館員充足のことで君のことが頭にあったが、すでに本省で館定員すべて手が届んでおり、と説明されながら、ぼくも山

座局長に特別頼んでみるので一緒に
行こう、となつて再び局長室を訪れた。その結果は「川上君まで必要なら本省の直接要員として真藤君を君に付けよう」となった。以後館開設の準備を手伝い、翌年二月初め、川上総領事に同行して現地に赴任した。

川上総領事は、越後村上の内藤藩出身で、維新後明治政府の薩長など



明治35年篠崎昇之助渡米献送会

(前列左から寺田・安永・篠崎・河村・真藤
後列左から大熊・勝田・河野・小河)

の藩閥主流に依る人ではなかった。早く東京外語に学んで露、英語に精通。日露戦最大の激闘を重ねた旅順の二〇三高地攻略後、有名な乃木大将とステッセル將軍の水師管會見に名通訳をされ、以来ロシア通として

外務省の評判も高かった。識見が概に富みながら人に気が取りを見せない苦勞人で、ぼくの良き指導者として後に北洋漁業への開眼を受けた大恩人である。

なお、先で語ることになると思うが、二十

数年後、すでに北洋漁業を代表する基盤を築いていた日魯漁業に最大危機を惹起、この背景には時の総理大臣(外務大臣兼任)までが裏面に介在するという政財界がらみの大不祥事件で、ついに郷党大先輩の杉山茂

丸さんの登場を得て、終局には日魯漁業社長に川上俊彦氏の就任など、夢にも思わぬ事態が出現するのである。

三十九年十二月、川上総領事ハルピンに転任、ぼくもこれに従った。この時、ハルピンにはぼくの第一回ウラジオストック時代の友人である近江岸弁之助が貿易商として早くも活躍しており、彼は主に大豆粕(農業肥料として日本に大いに輸入、先の大戦には代用食になった)の買付けをやっていた。

明治四十年に入って、政府からの特命で吉林省——黒龍江省一帯の農産物調査隊を編成、隊長川上総領事にぼくが随員、一行には農林省伊東技師、三井物産中山社員、大阪朝日の岡野記者、これに近江岸など十数人で約二カ月に及ぶ有益な大旅行に

なった。四十年九月、日露漁業協約成立。ときに、ぼくは川上総領事から同協約の成立を期して、わが国の北洋漁業に対する取り組み方について教育と指導を得ており、何等のためらいもなく生涯を賭けて北洋漁業に挺身の覚悟ができていた。

川上総領事から直ちにウラジオストック総領事野村元信氏に紹介と依

能古博物館だより

頼をして貰った。以来、日露新協約による広い漁区制定とその入札は毎年ウラジオストックで行われるのである。

この間、ぼくは帰省することなくただ手紙で詳細を父に知らせ、母にも心配しないようくれぐれも頼んだ。さて、ここで参考のため北洋漁業に関する、わが国の経過と実態について少し述べておこう。

日本の北洋漁業は、北海道沿海に始まって、江戸時代の後期には樺太から露領シベリアの沿海州にまで進出して来た。また、わが千島列島から露領のカムチャッカ半島にも出漁していたと思う。当時のサケ・マス

漁は沖合い漁でなく専ら河川を遡上するサケの生態から河口または河口に近い海域に網を張る漁法が多く、このためには網場に近い陸地を使用

して、樺太、沿海州、カムチャッカ半島では露領に仮設小屋を作るなどした。従ってそれが季節の短期使用であつても相手国には不法侵入となる。このためロシア官憲の取締りと

圧迫を招いて、時には漁夫射殺の不祥事件も発生していた。ただ、これら地域の原住民漁法は、網その他の漁具が幼稚で、大群で遡上するサケを手取りに等しい方法で

捕獲、その多くは日本の出漁者による食糧、酒、雑貨類と彼等は主に毛皮類、これに塩蔵サケ類を加えて交易し、なお日本漁業者の短期上陸には協力を示した。

こうした経験から、沿海州、樺太に比し、東ベリリング海と西のオホーツク海に大きく突き出すカムチャッカ半島は、その面積がほぼ日本の本土に等しく、半島の中央やや東寄りに縦に伸びる山脈は四季白雪を見せて美しく、これを源に東西両海にそそぐ大小二百を数える河川があり、その清冽な流れは、太古の神がサケ・マスの生殖に与えた聖域と呼ぶにふさわしかった。

このため明治三十年に入ると個々の日本漁業者による不法で冒険的出漁が多くなり、とかく日露両国の制約と取締りがぐりかえされていたのである。

新しい日露漁業協約は「日本海、オホーツク海及びベリリング海に面する露西亜領地の沿岸に於ける漁業権を、日本国民に許与する為、日本国と協定をなすことを約す」として、一定の漁区を入札制によって使用を認め、漁獲の加工、製造について日本をロシアの漁業者とすべて平等に取扱ひ、漁獲とその製造品すべての

持出しについて輸出税を課さないとした。

ここでいう漁区は、海岸の満潮線から陸地二十米を通路と見なして、さらに奥行き約百米、間口三百四十米、約三万四千平方米(約一万一千坪)の陸地使用を認めることになつたのである。これによって日本漁業者は漁具格納、漁業労働者の宿舎はもとより塩サケ加工と缶詰工場と関連資材倉庫などの設備が可能となり、これを基地に海面操業すべてに安全を保障されたのである。

日本漁業者は以上を総称して露領漁業と呼んだ。

以上を、今日の公海沖合での広域移動母船式操業に比較すると、河口を中心に両沿岸に押し寄せるサケ群によって海が盛り上り銀色に変わるのを肉眼にして、網を張るのは格段の相違が判断されると思う。

ぼくは、十一月ウラジオストックに移つて新協約による漁区制定とその入札について調査勉強するため退職を川上総領事に申し出た。これに対し総領事は、いよいよウラジオを離れるまで在職しておく。さて「新協約による北洋漁業は、君は充分に認識しておるが、今次の戦役による国民の尊い犠牲と国力を傾けつ

くして幸いに勝利を得た結果であり、従つて国家、国民の權益にされるものである。どうか、この事実を日本の参加事業者全員が共通の認識にされるよう努めてほしい。」と。実に立派な教訓として、あらためて川上さんの識見に感動を覚えた。残念ながら北洋漁業の隆盛に伴つて、こうした精神を逸脱し大事件になるのであるが、川上総領事の達見には、今日でも頭の下がる思いがある。

さて、ぼくは幸いに父母には義軍参加による思わぬ貯金を残し、また川上総領事の好意に甘え、自分の生活には不安がない。しかし北洋漁業に向うには全くの無資力である。よつて当分は良き事業者の手足になり、一応のロシア語と漁区入札の知識を活かし、北洋漁業ひとすじに将来を固めようと心に期していた。

近江岸が、一万円位なら力になるよと言ってくれたが、いまは必要ないと答えた。参考までに、ぼくの外務省属官としての最後の給与は、月四十五円、外地手当二十七円の計七十二円であった。いよいよ、ウラジオストックにおける漁区入札期日「明治四十一年四月」は目前になつた。(以下次号)

●平成2年 7/10~7/15・7/24~8/5

当館にて西南学院大学の博物館学芸員実習が行われました。

学芸員実習を終えて

西南学院大学文学部

木戸 祥子

三週間の学芸員実習を終えて、私が今感じていることは、「能古博物館に実習に来て良かった」ということです。そう感じるのは、この博物館に来なかったら普段体験できないようなことにチャレンジできたからです。

例えば、粉食文化に関する資料をまとめるため、能古・どんの工場を見学し、そば・勢というお店では手打ちうどん作り挑戦しました。そして、そば勢のご主人のお話からは伝統文化を守る誇りと手打ちに対するこだわりを感じました。職人さんのようにうまく作れませんでした。自分達で作ったうどんの味は格別の



グループに分かれて課題研究

ものでした。

この実習期間中、私は毎日、「学芸員とは何か」ということを考えていました。実習初日、学芸員の方には、照明・紫外線・展示位置などの説明をうけ、観覧者とは違った学芸員の視点で館内をみました。また、展示室・ケース内の温度・湿度の統計グラフを作成し、展示物にとって一番よい環境で展示するための学芸員の陰の努力を知りました。一方、人々の生活も豊かになりました。これから

二十一世紀はまさに文化の時代になることでしよう。そういった中、学芸員は、冷静に本物を見る目と広い視野を持ち、時代を支えていかなければならないと思います。三週間いろいろな体験を通して、多くのことを学びながら新鮮な毎日を送ることができました。博物館で得たものは私の貴重な宝物です。

能古博物館の皆さん、ありがとうございました。

博物館実習

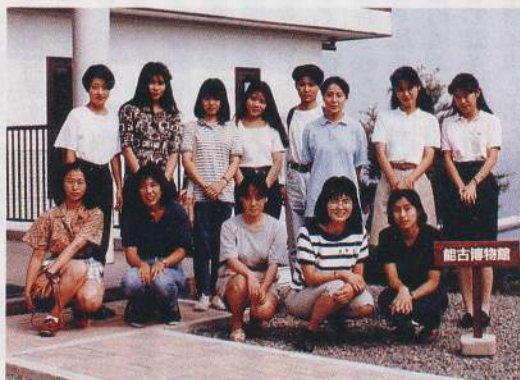
西南学院大学文学部

岡野 慶子

打ち合わせのため能古博物館を訪れた時には、まだセミの声も涼し気に聞こえました。

しかし実習中のセミの声はとにかく暑さを増長させました。三週間暑さとの闘いでした。

さっそく早起きして出勤です。セミが大合唱する坂道を登って館に到着。ホッと一息つく暇もなく事務所に入り受付の手伝いです。ある時受付にカブト虫が三匹いました。訪れた子供達にプレゼントするためのものです。やっと子供連れの家族がみえて大変喜んでくれたときは、私も嬉しくなりました。



本館前にて記念撮影

また、多々羅画伯についての資料をまとめるため、能古に残っている絵を尋ねて歩きました。その時島の小学校を訪れましたが、校内には生けすや畑があり、鳥らしい風景に心なごみました。こうして資料を収集するうちに、画伯は私にとって馴染み深い画家となりました。

実習を終え、博物館が身近に感じられるようになりとても嬉しく思います。今後、能古博物館が市民の教育と憩いの場として、人々に来館されることを願っています。

- 麻生裕子さん・福井千鶴子さん
 - 木戸祥子さん・山崎智子さん
 - 羽野連平くん・岡野慶子さん
 - 川口 歩さん・古賀喜代子さん
 - 有馬千春さん・植田浩代さん
 - 柴田朋子さん・高橋真弓さん
 - 竹内智子さん
- 十三名の皆さんお疲れさまでした。今後のご活躍をお祈りしています。

けいしゅう
閨秀

亀井少栞伝(六) 庄野寿人

恵まれた詩才・父の烽火番・人生の無情

文化五年(一八〇八)十一月十日、父昭陽に男子出生。次男鉄次郎である。後に陽洲と号した。長男義一郎の成育も順調で早や四才になる。十

一才の少栞はお姉さん役よろしく、自分がされたように弟義一郎の習字を熱心に教えていた。

翌文化六年、五月。日田の広瀬淡窓が師昭陽と亀井家を六年ぶりに訪れた。前回は享和二年、祖父南冥の還暦寿宴に出席して以来で、当時の少栞は五才の童女に過ぎなかった。淡窓は少栞の成長に驚くと共に、その印象を己れの「懐旧樓筆記」に次のように記している。

予亀井家ヲ訪ヒシ時、先生ノ女少栞、相見テ詩ヲ贈レリ。少栞名ハ友。予福岡ニ留塾セシ時ニ生レ今年十二歳ナリ。幼ヨリ経史ニ通ジ詩画ヲ善クシ名誉アリ。予亦之ニ詩ヲ贈レリ。曰ハク

小女裁し詩丹管軽

(小女詩を裁し丹管(註し)軽やかなり)

洋洋南雅使一人驚洋々南雅人を驚かしむ

国風千載推清紫清紫(註3)を推す

多是鄭声兼衛声多く是れ鄭声(註4)と衛声(註5)を兼ねたり

此女長成ノ後、先生門

人三苦源吾

ヲ以テ贅婿(註6)トス。

姓ヲ改メテ

龜井ト称ス。

源吾モ余亦相識レリ。

雷首ト号ス。夫妻何レモ文壇ニ名ヲ得タリ

(文化六年五月ノ条)

以上原文ノ通り

この文の冒頭にある少栞が淡窓に贈った詩について実見されないのが残念であるが、この少栞詩に淡窓が



小栗鶴画 (33.6×29.2cm) 嘉永7年 57才作

和して贈った詩が右の記事である。当時の学者文人は詩を贈られると、必ず和して返すのを礼儀とした。さて、少栞の天分を父昭陽が珠玉を磨くように仕上げている様子が、淡窓の素直な賞讃によってわかる。この年の八月、かねて父昭陽が増築していた書室が完成。この建物は家塾の講堂にも利用できる広さで、父昭陽は「広きこと以て弓を容るべし」と表現した広間であった。

室号を「梨谷」と名づけた。この意は、俗事を離れて、学問を楽しむ、とされる。おそらく父昭陽が生涯の願望として持ちつづけただことであろう。

昭陽は、最高弟の片山子沢(長州藩士で藩学明倫館の備員)に落成の音頭を取らせ、門人らと祝盃を挙げた。少栞は母を手伝い料理を作った。いよいよ、これで父は、祖父南冥

以来の亀井学と家塾を確守するため塾堂の規模を整えたのである。

亀井家が、こうした増築と、その完成祝いの二日後、なんらの前触れもなく、父昭陽が属する城代組頭から招集され、父は烽火台番の勤務に就くことを申し渡された。

このため父昭陽は、以後二年三ヵ月間にわたる拘束を受けるが、その厳しい勤務の詳細は、本稿以後の「昭陽伝」にし、ここでは概要を簡略に述べておく。

烽火台の設置は、長崎港にオランダ以外の異国船が侵入した際、長崎奉行が江戸幕府に通報する手段として、長崎から小倉藩まで烽火によって速報する。これを受けた小倉藩は大坂城代までの急使(早や飛脚か早馬)を準備し、次の長崎奉行書状の送達に待機したのである(註7)。

このため、かねて長崎警固を勤める佐賀、福岡両藩は地理的にも両藩によって小倉藩連絡は可能で、佐賀、福岡領内に前後の見透しができる高さ三百米程度の山陵に烽火台を設置して、これに昼夜の見張りや烽火打ち上げの番士を常時勤務させた。この番役を烽火台番と呼んだ。

福岡藩は、佐賀藩が長崎から自藩領内の五烽火台の最終烽火を福岡領

能古博物館だより



少栗菊図

(124×28.3cm)

の最先「天山」(筑紫野市)烽火台に受け、次の「四王寺山」(太宰府市)、さらに「しよけ越」(嘉穂郡筑穂町内住)、「龍王山」(飯塚市)、「六ヶ岳」(鞍手郡宮田町)を経て、最終は「石峰山」(北九州市若松区)によって小倉藩見張台「霧岳」中腹に伝達を果たすのである。

この福岡藩六烽火台に、番士三名宛を配置、この三番士は昼夜通しで交替当直する。その助手は付かず、わずかに各烽火台所在の村から炊飯を主にする夫役一名を提供されるだけであった。各台の番士は十日間勤務で次の交替番士到着によって下山し、帰宅休養十日間で再び上番勤務する。

福岡城下から六烽火台の距離は、石峰、六岳が一泊二日の旅程で他の四烽火台は一日行程であった。

城代組士の当時総人数は三百二十士(平士のみで家業の組士は除く)で、この総員から六十名程度が烽火台番に就役要員とされた。城代組に

は、郡方下役、城内見廻り、城門警備その他多くの勤務があり、これに今回の非常要員が加わったのである。以後、昭陽は文化七年十一月まで通計十一回の上番を果すことになる。番士には病氣、事故による欠勤者が続出するが、父は皆勤であった。

幸いに現在、この烽火台と番士勤務の状況が詳細に知られるのは、昭陽が克明に記録した「烽山日記」による。この昭陽記録は、現今に於て唯一の第一級資料で、他には小部分の記事が散見するに過ぎない。

この昭陽日記の内容は、烽火台に関する経緯と実態を精写するだけでなく、将来の公開を充分に考慮し、亀井字の特長である古文辞を自在に駆使し、昭陽の豊かな学殖と文藻(註)によって当時から文学として高評された。このため各地に美事な精写本となって伝存していることが事実を証明する。しかも昭陽の烽火台勤務は各烽火台に及んでおり、これによって各地の状況、その往来行

路の様相が知られる。

また、昭陽の十日間勤務を聞き伝えた亀井塾の旧門弟と文人たちが見舞いに訪れ、また往復路に待って供応接待する者など、地方における亀井人氣がよくわかる。

一方、昭陽は烽火台設置とその麓村に番士給養と食事を賦役させる藩制などの仕組みについて批判をきわどく述べるとともに、状況によって昭陽に旧時の回想を生じさせ、これは思わぬ事実資料にされる。家族に及ぶ記述の中では本篇の少栗記事もあり、以下に抄出して利用する。

まず、父昭陽が烽火台番として初出役する前日二十二日朝、自らの講義を終えると、高弟の片山子沢に留守の塾宰配を依頼し、講義を「孔子家語」として代講を托し、塾生全員には、子沢を自分同様にして学業をおこたえることを強く戒めた。

二十二日出立の早朝、父昭陽は離れ屋(草香江亭)の祖父南冥に「いま出発します」と声をかけ、祖父は「よく勤め、無事に早く帰れよ」と。二女敬(十才)と長男義一郎(五才)は、まだ寝んでおり、父はこれら両児の頭をなでて別れを告げた。少栗と母は門に出ており、次男の鉄次郎(二才)は母の懷に抱かれ、父はそ

の頭をなでた。門弟一名が提灯を持ち先導する。午前三時頃である。ほかの弟子たちも見送ろうとするのに、父は許さず制止した。ただ子沢と弟子一名には藩承認の駄馬寄せ場で旅具を荷駄とするため同行させた。

今日から考えると、わずか十日の県内出張に大げさな出立と家族別離のようであるが、当時は一日の生別も死別に通ずるとした。事実、旅先の水がわりと疫病の発生、また事故に対する応急の方法と連絡不便による失態など現代には予想もつかない不安があったのである。

父、最初の勤務は鞍手郡宮田町の六ヶ岳で福岡から一泊二日の行程で暁暗に出発して赤間一泊、翌日の昼に六ヶ岳烽火台に到着した。

次の上番は、嘉穂郡筑穂町内住のしよけ越に九月二十日出立。前動十日と在宅休暇十日の定め通りである。父昭陽の朝は早く、勤務と刻を違えることのない厳格さであった。この出立にも長男義一郎は眠っている。父は前回と同じくした。父は寝ている子は起きなかつたのである。外は皆、門に立って見送った。また毎回、門弟二名が師の着替えなど行李荷物を持ち旅泊御用請負所で駄馬に積ませ、父がここまでというま



高士遊歩図(部分)・実物大

六才死去。世に亀井五
亀(祖父と祖父弟の曇
栄。父と大莊、大年の
三兄弟を加えた五人を
いう)と評された一亀
が欠けたのである。三
年前、少槩に格別のお
扱いをいただいた秋月
の御殿様の御逝去とい
い、いま身近い叔父大

で従行した。
この行路で二又瀬を過ぎる時、去
年三月、昭陽は少槩同伴で須恵に招
遊され同じ道を通ったことを回想。
この地は地名の通り宇美川と須恵川
の二流に挟まれて、景色の妙を成し
ている。

折柄、春もうらからかで思わず歩み
を止め茶亭に休憩した。時に、わが
家塾に留学する平戸藩で才人の評が
ある神村玄条を同行しており、互い
に詩作の気色が通じた。よって少槩
を加え三人で分韻して一詩を得よう
と、これには少槩も大いに愉色(註⑤)
を示して即座に成して行路さらに楽
しくした。この分韻というのは、韻
を互いに持ち合い即興詩を成すもの
で相当の心得がある。時に少槩十一
才であった。本稿の初めに、広瀬淡
窓が少槩に感賞する前一年余のこと

である。

さらに少槩の学力がうかがえる一
文を加える。昭陽「烽山日記」文化
七年八月十日、龍王山(飯塚市)に
出役する前日夕刻、昭陽は講堂に於
て門人全員の唐詩選五言絶の会講を
終結した。これに少槩を「最と為す」
と。即ち少槩の成績を最良としたの
である。

亀井塾の会講は、門人の学業成績
を判定、進級テストにするもので、
これは本誌前号に「亀井塾の学規」
の題で九大の町田先生御寄稿の通り
で、全員参加によって公開にされる。
少槩父であっても私情の余地は全く
ない。少槩十三才、亀井塾多数の門
弟に伍しての評点である。
この年、七月に昭陽三女出生。少
槩の妹で「世」と命名された。
同年五月二日、叔父「大年」三十

年の死に際して人の世の無情を少槩
多感にとらえたと思う。

少槩十五才。父昭陽は、わが家に
増築して少槩居室として与え、これ
に「窈窕邸」の室号を付けた。窈窕
の意は女人の奥ゆかしさ、しとやか
さ、など。詩経に窈窕淑女の語を見
るが、父昭陽は、そのすべてを少槩
にしたのた。

三年後の文化十二乙亥の年、少槩
自らいままでの詩を選んで「窈窕稿
乙亥」一冊にまとめた。以下、この
詩を読むことにしよう。

(以下次号)

【註】

- (註一) 丹管(たんかん) 絵と書筆のこと
- (2) 国風千載(こくふうせんざい) 歴史に永く伝える
- (3) 清紫(せいし) 平安朝の女流才媛。清少納言と紫式部のこと
- (4) 鄭声(ていせい) 鄭は周の時代の一封国で、よく治まり音楽歌唱が盛んであった。
- (5) 衛声(えいせい) 前に同じ
- (6) 贅婚(ぜいこん) 入りむこ
- (7) 大坂城代から江戸へは常時早馬の用意があった。
- (8) 文藻 詩文をつくる才能。文才。文章のあや。
- (9) 愉色 喜びの顔つき、愉快な顔色



火の夏 能古島(句会)
火の会

花蘇鉄荒れの極みも火宅以後	ひふみ
藩窯の呉須の片々蟬涼し	静
風死して天女は笛を吹き惑う	君代
渡船場の片陰に入り商へり	蓬頭
夏海都会重たく沈みを見る	吉美
納屋を出て海へますぐ裸の子	山本すみ
朽ち舟の乾く歲月風死せり	星一二三
蟬しぐれ島の余白の休耕田	こうじ
南冥書島ふところの館涼し	律子
秋隣肩衝茶入銘おぼろ	とみ子
渡船つき島のふくるる夏休み	登志
炎天の鉄塔牙をなす都心	節朗

平成二年七月二十九日於当館研修室
参加者 三十名

〔註面の都合により編集者一存にて多数割愛いたしましたことをお許しください〕

読者のコーナー

◎たくさんのお手紙を頂きましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。

○先日『会員優待証』が届きました。暇ができたら行きたい、と思いつつ、就職活動にとりまぎれていまだ叶わずにいます。決まったら絶対に遊びに行きます!!

福岡市中央区 五嶋千恵

○能古博物館だよりを送ってくださってありがとうございました。読

者のコーナー”が目をひきました。これからますます読者に近い博物館だよりを作ってください。

福岡市早良区 吉川千秋

【東京都】石野智恵子様【福岡市】児島正孝様【糸島郡】盆子原淳子様ほかの皆様よりお手紙を頂きました。ありがとうございます。

※お願い

近況報告、近頃思うこと、当季誌に対するご意見等、館員一同皆様からのお便りをお待ちしています。

訪新設能古亀陽文庫

能古巒腰成玉樓

水明山紫眺望優

龜門翰墨貴開展

神韻渺茫千載留

寄能古亀陽文庫開設

翠黛鳥巒浮海灣

山茹海錯賜恩殷

古今碩學函犬煥

文庫新聞道統環

能古の巒腰成玉樓成り

水明山紫眺望優なり

龜門の翰墨貴開展し

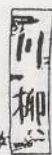
神韻渺茫千載に留む

翠黛の鳥巒浮海に湾

山茹海錯賜恩に殷なり

古今の碩學函犬煥たり

文庫新聞道統の環



末松仙太郎句集

「風宴」発刊記念句会

— 姪浜川柳会 —

祝吟

能古の海も祝福をする風の宴

五十鈴

風宴へ集う友あり能古は風 十三枝

足跡に宴の風はそよと吹く 千寿丸

八月の書架を彩どる風宴に 百万両

風宴に紫雲棚引く能古の島 たみ子

風宴の行間に透く愛を読む いく子

風の宴 人生と酒 家族たち 光子

新刊に風囁々と語りかけ 重義

遠い記憶が心に響く鉾山の詩 史

わが薄き掌に風宴は重たかり 一男

夏風の宴に千の友を持つ

彦岐川柳会

登り窯

蝉しぐれ往時は夢幻登り窯 仙太郎

焚口部今日が始まる火が迅る 青鳥

破陶鎮魂薬緑き登り窯 継生

炎は斜め愛伝えてよ登り窯 はつ

無口な老父ととても気が合う登り窯 ふく世

能古散策こんな所に登り窯 よしお

火の神に祈る幾夜を登り窯 保枝

高麗の流れも能古の登り窯 青六

蝉時雨登り窯いま火を孕む 今日造

熊笹の褥にねむる登り窯 恵梨子

煙一すじ能古の港の窯の跡 虎夫

焼け肌にまだ芽ぶき見る能古古窯 由利子

登り窯能古の地肌を這う炎 紗智子

廻船に煙は能古の登り窯 新二

陶片に往時を偲ぶ能古古窯 瑞こ

古窯跡龍の肋のように這い 湖水

末松仙太郎集『風宴』発刊を祝し、去る八月九日、当館研修室に於て記念句会が催されました。折柄の快晴、絶好の句会日和のもと総勢四十七名の参加を得て盛大なる句会となりました。当日二百五十余りの句が詠まれましたが、誌面の都合により右記のみを掲載させていただきました。多数割愛いたしましたことをお許しく下さい。

福岡市東区 和田慎治氏自作自筆

亀陽文庫・能古博物館友の会

平成2年10月15日まで受付分・敬称略

- 【福岡市】・星野金子・岩重二郎
吉村雪江・坂田泰溢・星野万里子
百田 孝・椎葉和郎・和田一雄
花田 範之・花田菊子・俵 信夫
金江たま子・岡本金蔵・中畑孝信
木戸龍一・玉置貞正②・森藤芳枝
西島道子③・行成宜貢・石川文之
西川真澄・片倉静江・江口博美
宮崎和子・横山智一・藤木充子
山口孝一・今村嘉代子・末松仙太郎
板木継生・吉原湖水・宮 徹男⑤
池上澄子・安藤光保・池田邦夫
野間フキ・和田慎治・浦上 健
宮崎 集・都筑久馬・齊藤 拓
柳山美多恵・吉村陽子・柴野美智恵
大石忠生・鹿毛義勝・小金丸弘子
【春日市】・後藤和子・【大野城市】
大西節子・【筑紫野市】・原 富子
西村国典・【太宰府市】・矢野杏子
安住美代子・長沢悦子・佐々木 謙
松尾マキ子・【筑紫郡】・上野イヨ
山口藤枝・大串ハマ子・古川ミチ
宮崎秋子・八藤丸和佐子・渡部良子
寺島輝子・坂井勝巳・【小郡市】
松澤アツ子・【宗像市】・原田國雄
【鞍手郡】・久保田正夫・【飯塚市】
小山元治・【甘木市】・宮崎春夫
井手 太・田中トクエ・【久留米市】
野田正明・【浮羽郡】・吉瀬宗雄
【北九州市】・平野 徹・片桐三郎
知足久美子・【東京都】・片桐淳二
山根貞与・【大阪市】・大橋孝太郎
【佐賀県】・山下郁夫・池田裕保

堀田和子・【北海道】・船越谷嘉一

註①は口倍数(負担、-)は前納年数です。御加入ありがとうございます。

亀陽文庫・能古博物館友の会会員

- 【福岡市】・天谷千香子・桑形シズエ
簗原ヨネ・笠井徳三・鬼塚義弘
柳ヶ瀬健次郎・三宅碧子・亀井准輔③
片桐寛子③・北原章子・清田友彦
近江福雄・小田一郎・松蘭守一
永田蘇水・古野開也・岩重一郎
長谷川陽三・財部一雄・安川民敏
村上靖朝・竹中弘起・廣瀬 忠
岡部六弥太・山内重太郎・野田和禧
向井盛信・小柳陽太郎・野田元子
西嶋洋子・柏 久・黒川邦彦
速水忠兵衛・高田浩二・馬奈木文衛
三好恭嗣・田上紀子・安松勇一
山田由紀乃・上田良一・西村忠行②
広瀬 猛・松尾 久・桑野次男
大橋孝子・片岡洋一②・青柳繁樹
重松義輝・青木繁樹・中村紀彦
【大野城市】・伊藤泰輔・田代直輝
【筑紫野市】・川浪由紀子・脇山浦一郎
大森節子・横溝 清・【太宰府市】
有吉林之助・竹浜いち子・大谷桂介
石田秀利・本木康枝・古賀謹二
蔵田はつよ・松本久子・吉塚隆一
吉田案山子・坂本斉子・佐藤かね子
浅野加代・田中ゆき枝・中村純一
宗兼仁子・村上美恵子・中村ひろえ
野田明子・【筑紫郡】・結城慎也
添田耕造・西村久夫・荒井 昇
田中文字・与那嶺利三郎・【粕屋郡】
櫛田正己・櫛田猷子・高森良一
神崎憲五郎・酒井俊寿・【宗像市】

大島成晃・【小郡市】・竹中誠二

- 【甘木市】・酒井カツヨ・佐野 至
泉 栄・三浦末雄・具島菊乃
井上 清③・【小石原】・鬼丸節次
高取八山・【糸島郡】・由比章祐
【柳川市】・川淵 学・庄野陽一
【八女郡】・松延 茂・【大牟田市】
嶽村 魁・【直方市】・山本利行
【筑穂町】・大久保津智夫・【苅田町】
木下 勤・【佐賀県】・中山重夫
甲木達也・佐々木信子・福永フミ代
【大分県】・橋本敏夫・【熊本県】
浜北哲郎・【大阪府】・小山富夫
【滋賀県】・小堀定泰②・【千葉県】
森 久・【宮城県】・田中信彦

註①は口倍数(負担、-)は前納年数です。

【協賛会員(個人)】

- 緒方益男(佐賀)・伊藤 茂(宮原市)③
立石武泰(福岡)③・白水義晴(東京)
出光芳秀(福岡)・菅 直登(福岡)
木原敬吉(飯塚)・大里豊男(福岡)
梅田光治(福岡)・花田加代子(岡垣町)
西村俊隆(東京)・池田謙介(福岡)
今林 昇(福岡)・高原敬治(太宰府)
江崎正直(大牟田)・中村 登(福岡)
小川恒之(福岡)・野口一雄(福岡)
大坪正治(太宰府)・奥村宏直(福岡)
荒木靖邦(福岡)・村上五一(福岡)

【協賛会員(法人)】

- 南九大みやび・池田謙介(福岡)
葦 書 房(南)・花本三多(福岡)
流通共済(株)・久田積夫(福岡)
物流システム(株)・平田真輝(福岡)
橋詰工務店(株)・橋詰和元(福岡)
東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡)
福岡流通警備保障(株)・村上五一(福岡)

お知らせ (行事案内)

「能古自然を歩く会」御案内

日時 11月8日(木)・11月17日(土)
11月24日(日)・12月1日(日)
10時44分姪浜発渡船で11時当館
着。11時20分当館出発。
コース 自然歩道→檜一雄絶筆碑→思案
の森→神話彫刻(全コース6km
当館帰着午後1時の予定)
昼食 一汁三菜、デザート、コーヒ
又は紅茶
参加費 会員八百円・一般千二百円
○軽装・スニーカーにて御参加ください。
定員は各回につき30名。(昨年の参加
者は女性70%、高齢は80歳男性)
○天気予報により雨天が予想される場合
は順延、又は中止を電話連絡します。

友の会 年間3千円

館の活動、館誌購読と催事企画に参加
自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

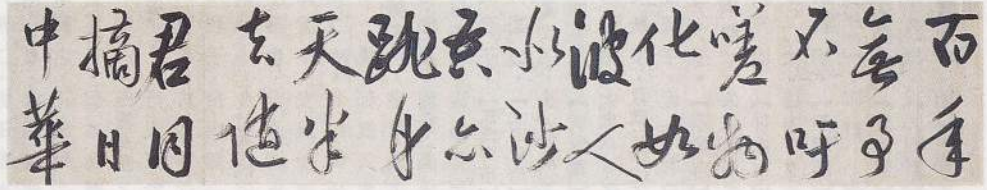
協賛会(個人) 年間1万円
〃 (法人) 年間3万円
館維持、資料収集、施設整備等の
援助に充てる
納入方法 郵便振替 福岡3160970

右の会費受領は、その都度本誌に掲載
以後会費相当期間を名簿として登載。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者
負担)をご利用下さい。用紙はご連絡
次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料
など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。

展示品紹介



半部です。詩は七言絶句を二字ずつ大書したものです。これを七言に整列すると、

上掲の書は、亀井昭陽の作詩自筆で全長3m 17cm、縦28cmの巻物の前

と。これに続く文は「呉門を去り旧廬を得、泊水（姪浜の別名）に寓し賦して大人膝下に奉呈す。甘古寓公書となる。寛政十年二月朔日、福岡城下未曾有の大火の火元に近かった福岡藩西学問所（甘棠館）および亀井屋敷ともに激しい火勢のため瞬時に焼亡、南冥・昭陽父子の著述稿本、家財すべてを失った。昭陽の妻は、初産に備えて姪浜の実家（早船家）に里帰りしていた。

百年無事石吁嗟
物化如波人似砂
吾亦跳身天半去
隨君同摘日中華
訓読は「百年事無くば石も吁嗟す。物化は波の如く人は砂に似たり、われ亦身を跳らして天半に去り、君に随い同に日の中の華を摘まん」となります。

なお意識すると「百年もなにごともなかつたら、きつと石もあくびをして声をあげるでしょう。物化（世の推移）は、打ちかえす波のようで、人間は砂のようなものです。されば、私は発憤、跳躍して俗界を飛び出し、父上と共に文華の粹を得たいものです」

南冥は、己れの生家でもある姪浜の祖父聴因の旧居（忘機亭）にて医業を開く三男大年と同居。昭陽は妻の実家に移り、後には同家の隠居正朔翁の離れ座敷（甘古堂）一棟を書齋と居室として使用した。この状況の中で、長女（のちの少梨）出生、五月十四日岳祖父の正朔翁死去。この翁は文事を解し亀井一家の支援者であった。

折柄、福岡藩は西学問所の再建をめぐって審議を続けていたが、六月になって西学廃校を決した。同校教官は全員儒職を解任、平士に改変（一般の武士にされる）された。こうした厄難が亀井家に続く中、昭陽は自らの志気を高揚するため前記の詩を父南冥に当てる形式を取って堂々と大書した。

時に、昭陽二十六才である。「甘古寓公」は、早船家仮寓中の号で、本書のほか二、三見ることができる。

◎少梨作の偽もの
最近、また少梨作品に偽ものが見られます。見どころは、現代の粗末な画仙紙を使い、その茶色の紙質を古く見せる。少梨自署もよく似せているが、筆勢がななく、墨色も薄い。絵もどことなく拙劣に感じます。少梨は、絵も書も上手です。

本号執筆者の紹介
丸山 雍成 氏

「能古島古窯をめぐる問題（続）」
九州大学文学部教授

庄野 寿人 氏

「真翁銅像ものがたり四」

「閨秀 亀井少梨伝内」

当館亀陽文庫理事長

編集後記

当館研修・講座室は句会をはじめ、ちよっとしたお仲間の集り等、気軽にご利用頂けるようになって参りました。窓外に広がる景色がっどいを盛り上げているようです。当季誌もそのような場になるよう心がけていきます。知的欲求を充たし、かつ読者の皆さまに楽しく参加して頂ければと願っています。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881